発行　特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

THEATRE & POLICY

シアター＆ポリシー
通巻　第５２号
平成２０年１２月２０日発行

俳優トレーニングの科学的アプローチを探る

～20 世紀俳優トレーニングの系譜～

第１弾
スタニスラフスキイとブレヒト
二つの「真実」を演じわける

現場で通訳をしながら、こんなに幸せな気分を味わったことがどれほどあっただろうか？スタニスラフスキイを含めて、これまでも様々なセミナーやワークショップの場で通訳を務めてきたが、これほど知的好奇心をくすぐられたことはなかったのではないかと思う。

企画者として、クリス・メグソン博士にお願いした課題＜一人の俳優がスタニスラフスキイとブレヒトの理念と実践を比較したうえで認識し、演じわけられるようにして欲しい＞は、決して容易なものではなかったと思う。それぞれに特化した指導者は存在するが、今回は対象に深く入り込みすぎることなく、若干の距離をおいて比較することを求めたからだ。メグソン博士にお願いしたのは、彼自身の専門が自然主義演劇とともに現代英国演劇だったからだ。後者はときにブレヒト的側面を持ち、また自然主義演劇を否定する性質を持つこともあって、この若き研究者であり実践家であれば、ブレヒトをもまた指導できるのではないかと考えた。かなりの勉強を強いたような気もするが、見事に期待に応えてくれた。

私の知的好奇心をそそったのは、自然主義演劇を『種の起源』を著わしたダーウィンの「決定論(determinism)」を基礎に語り始めたことだ。与えられた環境、伝統、社会構造が私たち一人一人の振る舞いを規定する、だから、それを探ることから演技が始まる…。文化政策の学徒としては、社会学者ブルデューの「ハビトゥス」に近しいものを見出す。実際のところ、ブレヒトの「ゲストゥス」にもつながる概念である。日本の現代演劇を見ていて、俳優がその役の階級や職種、空気を兼ね備えていないことに気づかされることがあるが、それは役の感情にばかり気をとられて、役の出自を分析する作業を経ていないからなのだろう。

もうひとつ、なるほどとうなずいてしまったのは、自然主義は人々の生活を写真に撮ることを求めたのに対して、ブレヒトは同じ写真でも、その生活の背景にある社会構造を描くためにX線写真を求めたという説明だった。
演劇とは何か。演劇は何のために存在するのかという問いにつながる。ドラマ教育がなぜスタニスラフスキイとブレヒトを不可欠なものとして教えているのかということも判然としてくるように思う。ブレヒト戯曲の多くが絶版になっている日本の現在を呪いたくなる。

ふと思ったのは、メソッド演技ばりに情感たっぷりに演じる俳優が、あるいは特定の様式に特化した俳優が、うまい俳優だといわれることが少なくないことだ。日本にはまた茶化して自分に引き寄せることを演技だと誤解する俳優も存在している。ドラマ教育でもその傾向は強く見られる。だからスタニスラフスキイも、ブレヒトも理解できない。戯曲が描く世界観がちっぽけなものになっているからかもしれない、演劇が社会性を失ってしまっているからかもしれない。
演劇の役割の再考が必要なのだろう。それなしには、俳優の演技もまた定義づけることができやしない。どんな世界観を演じる俳優がいま本当に必要なのだろうか？　「俳優トレーニングの科学的アプローチを探る」から広がるものを感じている。（中山夏織）

シリーズ

劇場を形成するもの

～ワークショップ～

中山　夏織

「劇場」という場に欠くべからざるものが具体的に何であるかは、国によっても地域によっても、またそこに働く人々にとっても、観客にとっても違う。そんなことを70年ぶりの10月の雪を体験したロンドンで考えた。「劇場なるものの定義が違う」のだと。その思いは地域劇場を訪れるとき、さらに強くなる。

地域の文化発信の場として華々しく開場した日本の公立文化施設はその形姿の美しさ、洗練されたデザインと機能を誇る。設置を担当した自治体職員は誇らしげだ。彼らの労苦や成果を否定するものではないが、何かが足りないと感じてしまう。前にカフェやレストランのことを書いたが、過去に創造された商品を提供する機能だけを果たしている劇場らしきものも多い。といっても、自主製作のためや、地域の人々の参加型プロジェクトのために、それなりにリハーサル室が完備されていることも少なくない。だが、足りないものがある。

英国を代表する地域劇場バーミンガム・レップの経営責任者と話していて、彼が驚いたことの一つが、日本の劇場には「ワークショップ」が付設されていないということだった。ここでいう「ワークショップ」は、俳優トレーニングやリハーサル、あるいは地域の人々が演劇を体験するための仕掛けではない。フランス語のアトリエのほうがわかりやすいかもしれないが、つまり工房であり、工場である。劇場とは、舞台と客席であると定義しがちな日本の私たちには彼がなぜ驚くのかが理解できない。システムや文化の差異とはそういうものだ。

ウエストエンドの商業劇場などは違うが、少なくとも地域劇場というカテゴリーで語られる非営利助成劇場のほとんどには、テクニカル・ディレクターのもと、舞台装置、小道具、衣裳・鬘を作るかなり巨大な工房が付設されていて、多くの専門職がそこに働く。大規模な溶接も、木工も、染色もそこで行われている。そのために一つの地域劇場で雇用するスタッフの数は80名から100名を下らない。その意味で言えば、地域劇場の経営責任者にとっての劇場なるものの定義は、おそらく多くの専門職が自分の専門を持って演劇という有機的な創造を産み出し、提供する「工場」であり、私たちが劇場と定義する舞台と客席はその一部に過ぎないことになる。そして、その経営責任者としての仕事は、単に公演を可能にするだけでなく、そこに働く専門職たちの雇用を保証するという側面が強くなる。どうしても理解し得ないという方は、ぜひみて欲しいドキュメンタリー映画がある。フレデリック・ワイズマン監督の『コメディ・フランセーズ～演じられた愛～』（1996年）である。フランスの国立劇場であり、国立劇団であるコメディ・フランセーズは、蠢くような巨大な工場であり、演出家と俳優、アドミニストレーターたちだけで存在しているわけではないことがわかるだろう（ついでにいえば、役人なるものの性質も見えてくるから面白い）。

日本でも劇場のバックステージツアーが企画されることは増えた。それなりに刺激的な要素はたくさんあるわけだが、「工場」としての劇場のバックステージは玩具箱的な魅力に満ち溢れている。

かつてある大規模な地域劇場のエデュケーション・ディレクターが劇場の「工場」で働く専門職の人々をそのエデュケーション・プログラムに生かす方策を探っていた。そうなのだ、彼らもまた演劇の魔法の担い手であるからだ。

ただ不思議に思うのは、そこに流れる時間が思いのほか、ゆったりしていることだ。私たちが日本の現場で目にするスピードとはたしかに違う。海外公演などの際に「とろい」「仕事が遅い」と批判する日本のスタッフは少なくない。ここにもシステムと文化の差異がある。

「工場」としての劇場をたずねてみると、演劇の創造をめぐるあらゆる作業は地味な一つ一つの積み重ねだということを改めて教えてくれる。適当にちゃっちゃとばかりにこなすものではない。時代は安直なパッケージや、スピード競争、小ずるいまでの要領のよさを求めるが、ここに流れる時間と思想はそんなものを容認しない。

バーミンガム・レップを訪れたとき、劇場のなかの「工場」は、クリスマス・ショー『ナルニア物語』の準備が計画的に、だが、ゆったりと進められていた。ゆったりは安全にもつながっている。そう見えた。玩具箱はそうやって演劇の魔法に貢献しているのだろう。

ストークオントレントに近いニュービクトリアシアターのワークショップ。

（なかやまかおり／アーツコンサルタント）

昨年に引き続き、あうるすぽっと＜豊島区立舞台芸術交流センター＞では 7 ヶ月にわたるアートマネジメントのインターンシッププログラムが展開されました。数々の小さな失敗を繰り返しながら、自分たちにとって大きな成果をあげた 4 人の研修生たちの思いをお届けします。

自分に欠けていたものに出会う…

西島　恵美

7 ヶ月に渡ったインターンが終わろうとしている今、5 月のあうるすぽっとに面接を受けに行ったこと、6 月にインターンの仲間や劇場の方々と初めて会ったときのことを思い返しています。そのときは、「公共劇場」に漠然とした関心を持っていたものの、その実情は何も分からず、とにかく公共劇場の現場に飛び込んでみたい、机上の理論だけではなく、実際にどのような仕事が行われているのか知りたい、という思いで一杯でした。劇場での仕事はもちろん、社会経験さえもない状態で、あうるすぽっとという「職場」に飛び込み、電話対応や仲間との共有の仕方など、基本的なことですが、社会に出る際には必要不可欠な多くのことを学ばせてもらいました。

あうるすぽっとでのインターンを通して強く感じたことは、ひとつのワークショップや舞台には本当に多くの人々が携わっていること、演劇の仕事においては「人」との繋がりがすべてなのだということです。このことは、演劇に限らずあらゆる仕事においても同様だと思いますが、特に「演劇」という生モノを扱い、「演劇」と「人」との出会いを仲介する演劇の仕事においては、その側面が一段と強いように思います。今までの人生の中で多くの人々に出会ってきましたが、そのような「人」との出会いや繋がりのありがたさに改めて気づき、それを大切にしていきたいという思いを、このインターンを通して更に強くすることができました。

また、事業を実現、そして成功させるためには、小さな仕事の一つひとつが必要不可欠なのだということも、強く実感したことのひとつです。炎天下の中、地図を片手に豊島区を自転車で駆け回り、区の掲示板に『ダンバリ』のチラシを張りに行ったことは思い出深いです。また、個人的に大きな達成感を得られたこととして、80 人近くに上る『渋さ知らズ de 怖いもの知らズ』のワークショップ応募者へのメールの返信を、2 日間かけて行ったことが思い出されます。これも一見小さな仕事のようですが、私の返信を心待ちにしている応募者の方がいる、彼らの一喜一憂が左右されると考えると、失敗や遅れの許されない大きな責任のある仕事でもあります。当日参加された方々の楽しそうな顔を見て、当選のメールを送ったときにもこのように嬉しそうな顔をしていたのかな、と思い、嬉しくなったことを覚えています。7 ヶ月のインターンを通して学んだ一番大きなことは、そのような小さな一つひとつの仕事の大切さです。「どんなに小さな仕事でも、自分にしかできないやり方がある」という中山夏織さんの言葉と、「苦労を楽しめ」という小田島雄志先生の言葉は、忘れることのできない大切な言葉として、胸の奥深くに残っています。

インターンの中盤に差しかかる頃には、ワークショップの広報も任せていただくようになったのですが、置きチラシを送付する際には、それぞれのワークショップに興味を持ちそうな人に届くような場所を探すことに、頭を悩ませました。それと同時に、ワークショップに参加してくださる方は、芸術や文化というものにもともと関心を持っていらっしゃることが大半で、今までそのような分野に関心がなかった人にまで対象の幅を広げるのは、とても難しいことだと分かりました。事業の質を落としてはなりませんが、質を保つと同時に、初心者を対象にした易しい事業をも並行できるのが理想形だと私は考えているのですが、それを実現するのはやはり難しく、公共劇場が抱える課題点を感じました。

事業が並行し、多忙だった夏から初秋にかけての時期は、あうるすぽっとで仕事を任せていただくことを嬉しく思いながらも、その分自分自身の時間が削られてゆくことに戸惑いを覚えもしました。また、10 月や 11 月は、大学の卒業論文に追われなかなか出勤できなかったことに悔いが残ります。しかし、今振り返ると、もっと時間を効率的に使うように、発想の転換をすることこそが必要だったのではないかと感じます。「時間がない」という言葉は、都合のいい言い訳であることが大半で、時間をどのように最大限に活用できるかは、自分次第だと思うからです。時間の使い方を始め、あうるすぽっとは、現在の自分に欠けているものに気づかせてくれる貴重な場でもありました。

最後に、インターン生を温かく見守ってくれた劇場の職員のみなさんや、シアタープランニングネットワークの中山夏織さんには、言葉では表せないほど感謝しています。このように和やかな雰囲気のインターン先に恵まれたことは本当に幸運だと思います。これからどのような人生を歩むにしても、お世話になった方々に恥じることのないよう、胸を張って生きていきたいと思います。

（にしじまめぐみ／早稲田大学第一文学部文芸専修 4 年在学中）

『人の思いに自分の思いを少しだけ乗せて相手に伝える…』

鹿島　ゆかり

研修期間の終わりは 2 週間後に迫っているが、この半年間で何をやってきたのか、何を得たのか、冷静に振り返ることはできていない。はっきりとした成果も充実感もまだないからだ。無我夢中に目の前にあることをやってきた。長期的な目標設定できなかったと指摘することもできるが、演劇の世界をほとんど知らなかった私には体当たりでぶつかっていくしかなかった。そして今、これは間違いではなかったと感じられそうな、何かが見えそうな、つかめそうな、「境界」に私はいるような気がする。

仕事内容はワークショップ運営を中心に、日常的な事務業務、広報活動、演劇制作など多岐にわたった。6 月、初仕事となった「おいしいジャズ」ワークショップに始まり、劇団昴による「クリスマス・キャロル」ワークショップ、夏休みのシリーズ企画「ダンバリ」、9 月の鴨下信一氏による「日本語の学校」と続く。これと並行して、プロデュース公演「瀕死の王」の稽古・本番を経て、10 月末に今年最後のワークショップ「渋さ知らズ de 怖いもの知らズ」を終えた。ワークショップと演劇制作が別物であるのはもちろん、個々のワークショップも特徴や形態を異にしている。しかし今振り返ってみると、日常業務も含めた全ての作業に共通点があることに気づく。それは物事の土台を形成する部分、全ての基となる部分である。ワークショップ業務では、応募者の情報管理や参加者の選出に想像以上の労力を費やした。応募した人の思いを自分たちが預かっていると思うと、返信ハガキ一つ作るのにも慎重になった。広報ではインターネットへの書き込み、チラシの発送、地域の掲示板への貼り込みなどを行った。誰に向かって情報を発信するのか、どんな文章が効果的か、チラシの宛先は間違っていないか、広報戦略から実際の相手に届くまでの過程を経験した。演劇制作では稽古場の仕込みからケータリングまで、表舞台には見えないが欠かすことのできない仕事の多さに驚いた。今挙げたような仕事は一般的に「雑用」と呼ばれるのだろう。その重要性はしばしば言われるが、言葉にすると陳腐だ。身をもって体験したからこそ、リアリティーが生まれ、納得できたと思う。ワークショップを楽しむ参加者を見たとき、初日を迎えた芝居を見たとき、自分の仕事はスタッフの方々の仕事と比べると本当に小さなものなのに、涙が出そうになったことが度々あった。達成感でも、うれしいという気持ちでもない、何ともいえない感情だった。

一方で、納得できていないこと、上手くいかないこともあった。その一つはチームワークである。大

学生、大学院生、社会人と様々なバックグラウンドをもった者が集まった今回の研修。それぞれがもっている時間、目的、モチベーション、全てが違う中でどうやっていくのか。相手の事情を尊重する大切さとチームの責務を遂行する大切さのせめぎ合いが常にあった。どこまで自分の感情を相手に伝えてよいのか、押しつけて、吐き出してよいのか。もしこの研修の優先順位が誰にとっても１番であったなら、全員が真正面からぶつかっただろう。しかしそうではないと気づいた頃から、自分の思いをぶつけることは少なくなった。これで良かったのか、それとも逃げずに向き合うべきだったのかはわからない。でも「ただ一緒にいることもチームワーク」というある人の言葉を聞いたとき、「そうなんだ、こんな形のチームワークもあるんだ」とモヤモヤした気持ちが無くなった。今も何が正解かは分からないが、4人揃ってプログラムを終えることができるのはとてもうれしい。

この仕事は人の思いと直に接する機会が多い。ワークショップでは参加者の思いはもちろん、担当する講師・アーティストの方々の思い、プロデューサーの思いを強く感じる瞬間が多々あった。稽古場はまさに、多くの人の思いが入り混じる空間だった。「私たちの仕事は、人の思いに自分の思いを少しだけ乗せて相手に伝えること」と研修が始まったばかりの頃に言われたことがあった。その時はどういう意味なのか分からなかったが、今なら少し分かる気がする。このプログラムで何を得たのかはまだ分からないが、この半年間、たくさんの人に出会い、たくさんの人の思いに触れ、たくさん考えた。研修はこれで終わるが、立ち止まらずに、どんどん進んでいきたい。そしていつか振り返ったときに、この半年間の意味が分かるのではないかと思う。

最後に、ご指導いただいた劇場スタッフの方々、ワークショップや制作現場でお世話になった皆様、そして研修プログラム講師としてご尽力いただいた中山先生に感謝したい。ありがとうございました。

（かしまゆかり／埼玉大学教養学部文化環境専修芸術論コース３年在学中）

『いかに状況を察知して行動に移すのか…』

久保　陽子

研修生として主に携わった仕事に、あうるすぽっとで企画されたワークショップがあります。現在まで５つのワークショップを終えましたが、それぞれが全く毛色の異なったもので、毎回発見することがあり新鮮でした。参加する人、目的、形態、内容、方法、雰囲気などそれぞれに向かうべく方向性があり、その場に身を置かせていただくことで様々なことを肌で感じることができたように思います。その中で特に重要だと感じたことは、そのワークショップがどこに目標を置いているのかということです。参加者が楽しい時を過ごせればいいのか、何か技術や知識を習得するものなのか、作品を完成させるものなのか、本番で舞台に立つことを目指すのか、など目標設定によってそのワークショップのあり方がずいぶん変わるということです。そしてそのことにより、ワークショップのサポートの仕方、つまり私たちがその空間での居方を変えることも必要となりました。目立たないよう端に控えていなければならない場合、一緒に参加した方が良い場合、何かの時に備えて気を配っている必要がある場合、のんびりと傍観していて良い場合、その時々で対応の仕方も変わっていきました。劇場での研修をはじめるに当たって、「空気を読む」「人の気持ちを察する」ということの重要性を説明されましたが、このことはワークショップの現場に限らず常に必要なことでした。様々な現場での研修は、いかに状況を察知して行動に移すかということの訓練の場であったように思います。

また、研修をしている中で、様々な私自身の問題にも直面しました。全く新しい環境に身を置くこと

で、普段の学生生活では気づかなかった自分自身のことが見えてきました。分担して仕事をする性質上、情報を共有すること、事細かに伝達することが必須でしたが、伝わっているつもりだとか、わかっているだろうという自分本位な考えや甘えによって、混乱を招いてしまったり、ミスをしたりしました。今更ながらコミュニケーションの難しさを痛感しました。また様々な種類の仕事を与えていただいたことで、すんなりと取り組めることと、戸惑ったり考えたり緊張したりすることなど自分の得意、不得意を発見できたことも収穫でした。

こうして振り返ってみると、もちろん現場で学んだ知識や肌で感じたことなど演劇や劇場に関する諸々のこともそうですが、研修ということを通して自分自身が映しだされたような気がします。演劇云々よりももっと根本的なところ、人間力のようなものの鍛錬の場であったような気がします。そういった意味で、今ここでこの研修をしたか、しなかったかでは、大きな隔たりがあったのではないかと思います。自分の未熟ゆえの苦い思い出も多々ありますが、皆様が温かく受け入れてくださったおかげで、前向きに良い教訓として今後に活かしていければと考えております、

中山先生、あうるすぽっとの皆様、研修生、本当にありがとうございました。

（くぼようこ／御茶の水女子大学大学院博士後期課程
人間文化創生科学研究科在学中）

『受講を機に人生をみつめなおし、新しい一歩を踏み出し…』

兵藤　あゆ香

あうるすぽっとでの研修期間をふりかえりまず考えたことは、自分にとってこの７ヶ月がどんな意味をもっていたか、ということでした。研修が始まる前の段階では、正直私たち研修生はどんなことをしていくのか具体的なことが見えず、自分の目的はどうやって達成されるのか漠然とした不安がありました。いざ研修が始まり私たちが取り組んだことは、主にワークショップ事業の広報、運営ということでしたが、私は参加者の方たちと顔をあわせながらいつも「この企画にどんな意味があるのか？」ということを考えていました。それは、私があうるすぽっとでの研修事業に応募するにいたった理由の一つであり、すぐに答えのでることではないと分かりながら、考えずにいられないことでした。私は、この研修を通して芸術や文化活動の存在意義を確認しようとしていました。

ワークショップ事業は、芸術や文化活動が社会に必要とされるために、なくてはならないものです。それはそうした活動が営利を追求しない性格のもの故、誰かの支援なしには成り立たないという構造に因ります。であるならば、支援してくれる方々へ利益を還元するという点でも、知ってもらう機会を提供するという点でも、実際に体験してもらえるワークショップという形態が有効なのは明白なことでした。公立劇場であればそうした役割を果たすのは責務であり、私の頭の中においてワークショップ事業は既に意義深いものと理解されていました。

しかしながら、実際の現場に触れてみると、そうした文字通りの役割だけではなく、ワークショップとは何かを生み出している場所だということに気づかされました。４ヶ月という長期間にわたるワークショップでは、受講を機に人生をみつめなおし、新しい一歩を踏み出した方がいました。何かをつかみとろうと真剣に取り組む受講生の方々の姿勢に、本気で学ぶことのすがすがしさを教えられたワークショップと出合うことがありました。どのワークショップでも応募してくださる多くの方は、人生を豊かにする活力源として期待をよせていました。生身の人々の様々な思いが、私の頭の中の紋切り型の“ワークショップの意義”という理解をはるかに飛び越え、もっと大きな可能性があるということを示してくれました。

また、一般の方を招いて劇場で発表する形をとったワークショップからは、芸術の存在する意味そのものをダイレクトに実感することがありました。受講生と会場に来てくださった方が渾然一体となって劇場を熱気で埋め尽くしている様には、人間のもつ根源的なエネルギーがジリジリ感じられ、理屈で言い表せないものがありました。そこでは芸術の力強さに心が震えることがありました。自分は芸術活動に何か意味を見出したいという思いが先行し、芸術そのものの素晴らしさを見失っていたことに気づかせてくれたことは、自分の中での大きな変化でした。存在意義という点においても、私自身が何度もワークショップを通して受講生に心を動かされた事実こそがそれだったと思えます。

他方で、今回の研修では公立劇場の可能性ということについて考える大きな機会となりました。広く文化や芸術に親しんでもらうことは、公共の施設である点でも芸術活動の性格からも、最も大切にされなければいけないテーマであることは明らかです。私個人の想いとしてもできるだけ裾野を広げて多くの人に、そうした活動に興味をもってもらうことが社会の中で認知してもらうために必要不可欠だと考えていました。ワークショップを開催するにあたり広報活動に取り組んでいく中で、私は芸術活動そのものに興味の薄い人に大勢来てもらうことに執着していましたが、そうして選んだ広報先からはなかなか結果を得ることはできませんでした。よく言われることではありますが、事業を企画する時にはどんな人を対象としているのか考えなければ、企画自体があいまいなものに陥ってしまいます。ワークショップも同じで、色々なバックグラウンドの人に集まってもらいたいという大きな期待を寄せながらも、企画の意図としてはどんな人に来てもらいたいのか、実際応募してくれそうな人はどんな人かを意識して広報先を選ばなければ結果に結びつかず、参加してもらわなければ本来の役目も果たせなくなってしまいます。そしてどんな人を想定するのかという点においては、考えていた以上に区民が意識されていることに驚き、戸惑いも感じました。なぜなら、私には広く人々に親しんでもらうことと企画の対象に見据える人の選択肢をあえて狭めることは相反することに思えたからです。この疑問についてもワークショップがひとつの気づきを与えてくれました。それは、多くの受講生がお互いの連絡先を交換している様子や、ワークショップ以外の場で関係を持ち続けている事実が、劇場が地域の交流センターとしての役割を僅かながら担っている兆しに思えたからです。劇場を地域という社会とのつながりから俯瞰すると、そのような役割に少しでも寄与していくことは、あうるすぽっとを始めとする公立劇場の目指す姿でありますが、なかなか伝わってこない性格のものと言わざるを得ません。現場に入って感じたことは、地域の交流センターという理想に近づくには、こうした人同士の結びつきを気が遠くなるほどに積み重ねる過程があるのだという実感と、伝わりにくいものだからこそ尊く、じっくり育んでいける環境を劇場が提供することが、本当に地域にとって必要と劇場が認識されるために取り組むべき課題だということでした。

研修を通して得たものは、他にもたくさんのものがありました。多くの人の協力のもとに成立している劇場の事業に関わる際には、いつもそれらの人の存在を考えて行動する責任があること、ささいなことでも確認を怠らないこと、自分の考えを言葉に出して相手に伝える大切さ等々、きっと自分でも気付いてない多くのことを得ているに違いありません。同時に私自身、応募当初の目的は果たしたと思いつつも、まだ吸収すべきものが少なからずあることを否定することができません。また、他の研修生の存在なくしては今の自分はなく、週末しか出てこられなかった自分の調整力の乏しさに反省の念がたえません。加えて、あうるすぽっとのスタッフの方々と共に過ごせる時間を十分有意義なものとできていたのか振り返ったとき、自信をもつことができず、もっと積極的な行動をとるべきであったという思いに駆られることも事実です。それでも、このような機会に恵まれ沢山の人に出会えたこと、芸術の力に気づく体験ができた七ヶ月を与えて下さったことに、感謝しています。お世話になったすべての皆さん、ありがとうございました。

（ひょうどうあゆか／会社員）

ＴＰＮドラマ教育ライブラリー第３弾　11 月 15 日発行

『ドラマ教育－倫理と展開』　編／シアタープランニングネットワーク

英国レディング大学のアンディ・ケンプ博士をお招きしての東京ならびに大阪での「ドラマインエデュケーション 2008」の記録。基調講演「ドラマ教育と倫理」、ラウンドテーブルディスカッション「ドラマ教育の可能性と展開－教育現場を変える!?　ドラマのチカラ」、ワークショップ記録などを収録。

A5 版　98 頁

頒布価格　1 部　800 円（送料込み）　お申込み・お問合せ　tpn1@msb.biglobe.ne.jp

発行　特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

助成　日本財団 The Nippon Foundation

編集後記

「俳優トレーニングの科学的アプローチを探る」プロジェクトが始まりました。この編集後記を書いているさなかも、第二弾の「メイエルホリドとマイケル・チェーホフ」の最終準備に追われています。メイエルホリドもマイケル・チェーホフも、スタニスラフスキイほどの知名度がないからか、暮れも押し詰まっているせいか、公演シーズンのためか、あるいはまた景気の悪化なのでしょうか、思いのほか参加者数が集まらないことに頭を抱えていますが、それもまた一つの現実としてたしかに受けとめていかなければならないのだと考えています。第三弾の「アレクサンダー・テクニーク」も含めて、記録を報告書にまとめて 2 月末をめどに発行する予定です（無償で頒布いたします。ただし、送料をご負担いただきます）このようなプロジェクトを一過性のものに終わらせてはならない、消費に終わらせてはならないと心しています。そういえば、自然主義演劇もブレヒトも批判の対象としたのは、物質中心主義の社会だとクリス先生が指摘していました。

あうるすぽっとでのアートマネジメント研修生プログラムも 2 年目が終わろうとしています。昨年の研修生たちとは個性もタイプも思いも違うのを実感し、指導する難しさを思い知らされてきました。このようなプログラムから最も学ぶのは、実は指導する側なのかもしれません。プログラムの組み方、一人ひとりの研修生とのコミュニケーションということだけでなく、チームを作るための仕掛けをもっとストラテジックに考える必要性があったのだと反省しています。ただ一緒に研修を行っているからだけではチームは生まれてこない…。これは劇場側にも問わなければならない課題です。

アメリカに端を発する金融不況が世界を覆っています。日本だけでなく、バブルを謳歌した英国経済も一気に不況に陥っています。世界の演劇状況にも、文化政策にも影響がでてくるのは必定。こういう時代だからこそ、演劇の役割を再考しなければならないのだとも感じています。（中山夏織）

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク（ＴＰＮ）

国際化時代の多様な文化という視点に立ち、舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリームシアターとコミュニティシアターの相互リンケージを目的としています。2000年12月6日、東京都よりＮＰＯ法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

theatre & policy シアター＆ポリシー

ＴＰＮの基幹事業として、2000年6月から定期発行（隔月間・年6回）されています。定期購読をご希望の方は、ＴＰＮの準会員としてご参加下さい。年会費３千円（送料込み）を下記までご送金下さい。尚、送金の際は、ご住所・氏名・電話番号を忘れずにご記入くださいますようお願い申し上げます。

郵便振替口座　００１９０－０－１９１６６３

加入者名　シアタープランニングネットワーク

特定非営利活動法人
シアタープランニングネットワーク
編集人　中山夏織
発行人　高山敦司
〒182-0003
東京都調布市若葉町1-33-43-202
TEL(03)5384-8715
FAX(03)5384-8715
tpn1@msb.biglobe.ne.jp
http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn